記者の目から見た日本のバスケット
日本バスケット発展のために

千葉直樹氏
読売新聞編集局
運動部

運動部の記者になって今年で１０年目を迎えた。一般紙（通信社やスポーツ紙もそうですが）の場合、バスケット担当記者は他の競技との掛け持ちがほとんどで人の入れ替わりが激しいが、そんな中で他の競技との兼務ながらかれこれ７、８年も担当をやらせてもらっている。

テレビやインターネットの普及でＮＢＡの試合経過や結果が自宅にいながら瞬時に分かる情報社会の中で、競技の現場でも残念ながら日本のバスケット界はレベル、人気とも世界に大きく水を開けられるばかりだ。

だが、今や国民的人気が定着したサッカーだって、アマチュアリーグ時代のほんの１０数年前までは現在のバスケットのような境遇に置かれていたわけであり、旧日本リーグ時代の試合会場にきていた取材記者の数は両手で数えられる程度だったと聞く。

ところが今やこの過熱ぶりである。記者として自分の担当する競技が紙面で小さく扱われることほど悔しいことはないが、サッカー担当として今年６月に開かれたワールドカップ（W杯）の熱狂ぶりを取材した身として「バスケットだって今に見ていろ」という思いを、本稿にぶつけてみたい。（ちなみに私は高校まで野球部に所属し、体育の授業以外でのバスケット競技歴はありません）

先日、サッカー取材の現場で仲間の記者とバスケット談義になった。今年４０歳の彼は高校の途中までバスケット部におり、当時の国内のバスケットを良く見ていたという。

思い出に残るシーンは１９７９年１２月に名古屋で行われたアジア選手権。モスクワ五輪のアジア予選を兼ねた決勝で演じた中国との延長戦の死闘だ。２点差で敗れたが、日本がアジアの壁である中国に最も肉薄した瞬間と言われる、あの試合である。

「あの時、北原がフリースローを入れてればなあ…」（筆者注。北原監督、ゴメンナサイ）と熱っぽく話す彼の心の中のヒーローは、中国の巨漢、穆鉄柱とマッチアップした岡山恭崇さんであり、北原憲彦さんであり、昨年亡くなったガードの山本浩二さんだったのである。

あれから２０数年が経ち、日本の男子バスケットは７６年モントリオール大会を最後にオリンピックから遠ざかっている。そして、コート上の勝負で勝てないという次元とは別に、最近になって表面化しているのが、対外試合に臨む以前の様々な問題である。

特に、代表メンバーの編成に関して最近の男子代表は迷走を続けている。

そもそものツマヅキは、監督の人選にあったし．９９年のシドニー五輪アジア予選の敗退を受け、日本バスケットボール協会はどのチームにも属さず、協会と契約を結ぶプロ監督にじっくりと時間をかけてチームを作ってもらうことを期待し、「専任監督制」を打ち出した。

だが、フタを開ければ、新監督はＪＢＬ監督との兼任だった。一本釣りを試みた何人かの若手指導者に断られた末の着地点だったが、その就任会見の席で「専任監督の方針は反故にするのか」との私の質問に「絶対に専任監督だとは言っていない。そういう選択肢もあったということだ」と協会幹部は答えている。

専任監督が指揮を取るサッカー代表を見ていると、代表監督は因果な商売だと痛感する。勝てば官軍だが、負ければ責任を１人で背負い込むことになる。自宅には嫌がらせの電話や手紙が舞い込み、我が子が学校でいじめの対象になることさえある。それだけの覚悟と熱意に見合うだけの報酬をサッカー協会が出すことで両者の関係は成立している。

男子の吉田健司監督は熱意と確かなバスケット理論を持った立派なコーチだが、ここ数年の相次ぐ企業の撤退で、成績次第ではチームの存続が危うくなる現在のＪＢＬにあり、代表活動との掛け持ちで自分のチームである東芝をゆっくり指導できないというどっちつかずの状況が果たして適切なのかどうか。今回のアジア大会でも男子は４強入りを逃がしただけに、専任監督制についてもう一歩踏み込んだ議論が必要だと考える。

昨年はアジア選手権を前にして、いすゞ自動車などの主力選手の代表辞退が問題となった。　背景にあったと言われる一部の関係者間の感情の対立を、日本バスケットボール協会は、何が何でも最強のチームを作るという強い信念のもとに収束させることができなかった。

そして今年、釜山アジア競技大会に臨む日本代表の編成で日本バスケットボール協会は決定的な過ちを犯した。　今年５月に発表した２５人の代表候補にすら入れていなかった佐古賢一（アイシン）を急遽代表に入れようとしたものの、８月末のエントリー期限が過ぎており、故障者による入れ替えなど考慮される理由でもなかったため認められなかったというものだ。　佐古の代表入りを承認したのは９月１２日の理事会だったが、この席でただ１人として、エントリー締め切り後の追加変更に疑問を投げかける声はなかったことはどうしたことか。

翌日になって協会幹部が日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）を慌てて訪れて、「最強チームで臨みたい」と理解を求めたが、後の祭りである。

“ベストメンバー”を巡る問題はバスケットの世界だけのことではなく、他の競技にも普遍的な現象だ。サッカー界でも、トルシエ監督の時代には、せっかく代表に呼んだ選手をまったく試合に使わないことに対して、チーム内をやりくりして選手を送り出したＪリーグの、特に外国人監督の間から不満の声が出たことがある。

アテネ五輪を目指して来秋に行われるアジア予選の期間中にリーグ戦を行うことを決めたＪリーグは、日本サッカー協会に対して「代表選手は１チームから２人以内にして欲しい」との要望を出している。それでも、日本サッカー協会は最強チーム編成を明言し、最終的にはその信念のもとにサッカー協会とクラブとの調整がなされるだろう。　日の丸の重みとはそういうものなのである。

日本バスケットボール協会の、今回のドタバタ劇は佐古選手のみならず、一度は決まった代表から佐古に押し出されて落選し、そして再び代表入りとなった日立の菅 裕一選手も合わせ、２人のプレーヤーのプライドを大きく傷つけた。

だが日本バスケットボール協会はその一方で重い腰をようやく上げて、若手からトップ世代までの強化に一貫性をもたせた「エンデバー制度」（サッカーのトレセン制度に相当する）の構想を立ち上げ、今年１２月の１８歳以下アジア選手権（０３年世界ジュニア選手権予選）で最強チームを編成するために、年末恒例の全国高校選抜優勝大会（ウインターカップ）の開催時期を年明けにずらすなどの検討を始めている。

来年はアテネ五輪アジア予選がある。五輪アジア枠の増加が確実で、２大会ぶりに出場の可能性が高まった女子に対し、男子には中国を筆頭とする厚い壁が立ちはだかって前途は厳しいが、バスケット協会執行部には、自らの財産である日本代表に敬意を払い、高い志で強化・編成を進めてもらいたい。

かつて少年たちが岡山、北原、沼田（宏文さん）の２メートルトリオを中心とした平均身長１９５セ

ンチという高さを誇ったチームにあこがれたように。
　最後にマスコミに身を置く立場から、日本バスケットボール協会の広報体制にも一言触れておきたい。

　バスケット協会の定例理事会（非公開）は夜の６時過ぎに始まり、終わるのは９時ごろ。
議題が多ければさらに遅くなり、各社とも早版の締め切りが気になる時刻である。　それでも責任ある立場の幹部が会見に出てくるなら夜遅くまで待っているが、広報担当者がその日の議題も満足に知らせないままに「今日は特にありません」では、記者は食いつかない。
　毎月第２水曜日の夜、理事会の終了を体協記者クラブで待っている記者は多くても４，５人という寂しい現状だ。公益団体の財団法人ならば、人事など特別な議題を除いて会議は原則公開とし、どうしても公開できないのなら最低限、専務理事クラスの人間が会見に出席すべきというのが私の持論だ。
　現にサッカー協会は定例理事会後の会見は午後４時には始まり、専務理事の出席のもとでその日のすべての議題が印刷された資料が配られて質疑応答が行われている。
　自分の仕事を持ちながら会議に時間を割かれる理事の立場はバスケットもサッカーも同じはず。月に１回の理事会を日中に済ませることがバスケットだけ無理ということもあるまい。　生意気な物言いになるのを承知で言えば、メディアで大きく取り上げて欲しいのならそれなりの広報体制があってしかるべきと考えている。